

日本人はなぜ図書館を建てなかったか

橋爪 大三郎 (社会理工学研究科価値システム専攻教授・社会学)

江戸時代まで、日本人は図書館というものを知らなかった。

「××文庫」という名前の、本をたくさん集めた場所ならあった。けれども、誰でも利用できるように公開されていたわけでもないし、目録カードや蔵書番号で整理されていたわけでもない。「本を集める公共の施設」という考え方がなかったのだ。

本がなかったわけではない。出版点数から言っても、読書人口から言っても、江戸時代の日本は世界有数だった。けれども本は、個人に私蔵され、本人が死ぬとたいいてい散逸した。娯楽的なものは、片端から読み捨てられた。どこにでも本があるという安心感のせいで、かえって本が大事にされなかった。

ヨーロッパやオリエントでは、様子が違った。神が人間と契約した書物＝聖書が、書物の典型だった。「トーラー」(ユダヤ教の聖典)も、「クルアーン」(イスラム教の聖典)も、代々読みつかれ、書きつがれた。巻物に手書きした聖典は、ボロボロになると新しく書写され、古いものは地中に埋められた。もうひとつの書物の典型は、法律書。王たちが、神から授かったという法を布告した。書記たちは裁判を記録した。本は個人の持物であるというより、最初から公共のものだった。

聖典や法律に人びとが注釈を加え、論争が巻き起こった。外交文書や行政報告が増え、参照するのが大変になってきた。そこで、図書館の原型が生まれた。そこには、個人を越え、時代を越えて受け継がれる文字が蓄えられていたのである。

神学者や法学者を養成する大学にとって、だから、図書館は何より大切である。神学論争や学説の展開は、人びとの知的な共有財産と考えられた。そして、人文学が復興し、科学が勃興したあとも、この態度が保たれた。図書館の書架には、小説や評論や、科学論文や、世俗的な個人的な著作物も並ぶようになったのである。

中国ではどうだったか。中国人は、政治的な民族である。儒教は神の権威を認めず、聖人(昔の政治家)の権威を認める。中国では、すべてのことがら、最終的には政治(人間と人間との関係)で決着するのである。

そこで中国人は、日本人よりも書物を重視する。歴史に名を残すためなら命も惜しまない人間が大勢いる。決まった書物を入びとに読ませるのが、政治の重要なテクニックのひとつである。このためかえって、中国では書物が残りにくい。政治家が、書物の絶滅大作戦をやるからである。梵書坑儒の昔から文革

まで、本はたびたび火にくべられた。昨日まで大切だった書物が、今日は町から姿を消してしまう。図書館を作って本を納めておいても安心できない。かえって目印になって、襲撃されるのが落ちだ。

日本の政治は、フィーリングが大切なので、書物こそまで重視されない。禁書はあっても梵書はない。ちゃらんぼらんおかげで、中国で滅失した書物や断簡がたまたま日本でみつかると、なんていうケースもよくある。よくも悪くも、本に対する日本人の態度は、組織的でも徹底的でもない。

インターネットや情報インフラの整備が進み、日本の図書館もだんだん使いやすくなってきた。それでも、書物の収集・整理・保存に偏執する「図書館の精神」が、図書館を職場とする人びとにまだまだ足りない気がするときがある。もちろん、利用者にはもって足りない。亡命中のマルクスが「資本論」を、そして、亡命中のレヴィ＝ストロースが「親族の基本構造」を、異国の図書館で書き上げたことを思い出すたび、日本の図書館はまだまだだなあと思うのである。

『ドンキホーテ』
創刊準備号(FYTTE 1月号別冊)
1996.1.5 発行pp.53 学習研究社
おまけ

橋爪大三郎
『橋爪大三郎の社会学講義』(発売中 夏目書房・1800円)は、「社会がわかって困る」という本。「大問題」(発売中 冬舎・1400円)は「社会科学で問題をエッセイしよう」という本。「科学技術は地球を救えるか」(発売中 富士通ブックス・2200円)は新田義孝氏と地球環境問題を徹底討論した対談。

伴野創
『理の戦』

過去を大事にする ために

橋爪大三郎(社会学者)

こどもの本というものはある。おとなの本もある。しかしその中間、十代の人びとのための本となると、見つげにくい。

昔は、こんなことはなかった。ほとんどの人が、小学校卒業で社会に出た。そして経験を積み、知識も増えていったけれども、難しい漢字が読めるとは限らない。そこで大人のための書物は、総ルビだった。小卒の国語力があれば、どんな書物も読めるようになっていた。となれば、十代の人びとは背伸びをして、大人の本を手にとればよい。世の中の本がすべて、自分たちのために書かれていたのも同然だった。

戦後、進学率が上昇し、高卒が当たり前になった。総ルビは姿を消し、一般向けの書物は高卒の知識を前提にして書かれるようになった。教育が普及し、文化が成熟した結果であるが、おかげで、中学、高校生の読む本がなくなってしまった。

その隙間を埋めたのが、雑誌、マンガである。性別、年代、ライフスタイルに合わせて、若者をターゲットにする雑誌が、店頭に所狭しと並んでいる。雑誌は本と違って、読まれる端から捨てられていく。本箱などという場所をとるものを、部屋に置く若者はめずらしくなくなった。茶色く汚れた古本は、インターネットに似合わない。単行本も雑誌といっしょに、ちり紙交換に出されてしまう。

本を大切にしない社会は、過去を大切にしない社会である。住宅は三〇年もしないうちにたたき壊し、学校で習った知識はあつという間に使いものにならなくなり、「オパン」「化石」と、年長者と言葉が通じない。自分がいざばらけ前に何を考えていたかすら忘れてしまっている。自分もたちまち忘れられてしまうだろう。

情報化社会とは、伝言ゲームの社会。出所のあやふやな噂はなしが増幅される社会である。こどもの頃からコンビニに出入りしていると、この異常な加減に気づかなくなる。本の権威をとり戻し、過去の豊かさに目を開く必要がある。

それには、出版点数が多くてはいけない。ロングセラーでないといけない。できれば、親の読んだ本をこどもや孫も読めるといい。雑誌文化とあべこべの、活字文化を絶えず発信し続けている必要がある。それには叢書も有効な方法だ。ちくまプリマーブックスが、そんな叢書の役割を果たしてくれるのなら、私は嬉しい。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』

1996.2.10発行 pp.177 朝日新聞 おまけ

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』

1996.2.10発行 pp.174 朝日新聞 おまけ



橋爪大三郎
『言語ゲームと社会理論』
勁草書房・1985年



橋爪大三郎
『性愛論』
岩波書店・1995年

性愛とは自分が他者の身体を欲する現象であり、人間は他の動物よりも高度で複雑な愛のかたちを持つ。本書は、この性愛をめぐる謎に社会科学的方法で迫ろうとする試みである。そこでは「性愛の分離公理」(=性愛領域が他の社会領域から隔てられていること)を軸に、猥褻が現象するのは当該社会が性愛領域を公的領域から分離したことの帰結であること、性別はイデ

オロギーであり、家族内部の分離さえ維持されれば原則的に不要なものであること、「近親相姦の禁止」は分離公理が家族内部に写像されたことの効果であることなどが明らかにされる。さらにはフェミニズムの動きに言及する中で、性愛倫理の彼岸への方向性が模索される。「性愛そのものへの切実な感性に引き寄せられた人々」におすすめの一冊。

われわれを取り巻く世界は「言語ゲーム」の巨大な渦巻のようなものとして存在している。世界の中心をなすはずの主体の形象もその中のみ生み出される。したがって主体が言語を掌握するのではない。むしろ逆に言語こそが主体を掌握するのだ。本書はヴィト

ゲンシュタインの「言語ゲーム」の発想に依拠しつつ、さらにはハートやルーマンの法理論を採用することで、法や権力といった社会的現象の言語的成り立ちを明らかにする。いわゆる「言語論的転回」の成果をいち早く取り入れたものとして必読の一冊である。

大学がその塔の塔といわれ、社会とかわりなく存在してきたのは、はるか過去の話。大学・短大への進学率が四〇%を超え、十八歳人口の減少で五〇%の割合に乗るのも時間の問題となった。大学は激しい変革の波に洗われている。二十一世紀に向けた新しい大学とは何か、各大学の模索が始まった。

◆大学の顔に

「価値システム専攻」(略称バルデス・VALUES)

「価値システム専攻」(略称バルデス・VALUES)という聞き慣れない学科が今

キャンパス探訪

東工大の挑戦

理系文系合わせた新学科

合言葉は「21世紀の首相」

チューゼツ工科大学と並んで世界に知られる同大の新しい顔に、と期待が集まっている。バルデスには、ユニークな音楽論で知られる細川周平氏を助教授に起用、文化人類学の上田紀行助教授を愛媛大から招くなどスタッフの充

◆追い風

「このときは、文明科学部

化、学際化が進む中で、より柔軟な大学教育を推し進めようという狙いで出された。具体的には一般教育と専門教育の科目区分は廃止し、各大学で自由にカリキュラムを編成できるようにした。以後、各大学は教養部の廃止ないし改組、またカリキュラムを改革するなど、大学改革が活発化。新学科設置とい

東工大正門



春、東工大(木村孟学長)大学院に開設された。「社会のトップに立つリーダーに必要な資質(価値システム)と能力(意思決定能力)を身につけるための大学院(説明会資料)だ。同時に「人間行動システム専攻」学科も新設された。共に、理系と人文社会系の学問を融合させた、世界でも初めての領域で、理系大

も初めて、米のMIT(マサチューセッツ工科大学)と並んで世界に知られる同大の新しい顔に、と期待が集まっている。バルデスには、ユニークな音楽論で知られる細川周平氏を助教授に起用、文化人類学の上田紀行助教授を愛媛大から招くなどスタッフの充

や情報学部などが提案された。が、機が熟さず、実現しなかった。外的な要因としては、行政側が新学科の必要性を感じていなかったことが挙げられる。それが、一九九一年に出された「設置基準の大綱化」が追い風となった。

「大綱化」とは、大学審議会の答申を指す。大学教育の改善(大学院の整備充実)などを柱としたもので、国際的な水準を定めた。この結果がバルデスとなって結実した。新学科創設の狙いは、これまでエリートの名詞だった東大法学部卒を超える、リーダーの養成だ。

「理工系と文系を合わせた、新しい学問領域があるのでは」と語った。バルデスに合格したのは、修士課程で合わせて十八人。中には民間のシンクタンクに籍を置いている学生やマネジメントコンサルタント業を開業している人など多様な顔触れがそろった。

「環境問題への関心が高まってきた時期で、便利さだけでなく、人にやさしい技術が話題になりはじめた」と語るのは森川陽、同大原子炉工学研究所長。新学科設置準備会の座長だった。

冷えたるもの

橋爪 大三郎

冷えたるもの。夏のビール。つらら。知床なる流水。ひとの知りたること、吾も知らずおかしとあわてふためきたる。冷えてわろし。それを横目にわがことに打ち込みたる。冷えてよし。雑誌・TVに恐ろしくのみ知りたることあり、なお冷えてよし。およそ何ごとも、ひとより先、まず初めにこそよけれ。ひともしずるとも吾もするはあしき習ひなり。おのれ一途に専心せば、冷えて冷えて氷たるべし。

【通訳】冷えたるものと言えば、ビール、つららといるいるあるけれど。でも、ウィンドウズ95を並んで買ってしまったあなた、あんまりクールじゃありませんねえ。もうちよつと情報発信力があればよかつたのに。いまだき情報はマスメディアに出た段階で、付加価値ゼロ(すてにかス)と思うべきなのです。

日本人の横並び感覚からは、何も生まれてこない。個性だ、自由だ、個人主義だと言っけれど、その実態は厳しい格闘技の連続だと知るべきでしょう。なにごととも徹底することです。そうすれば、時代を超える可能性が見えてくる。

世界最冷的東西は何ぞ? 那又不是氷、又不是雪、而是電腦。人腦熱、電腦冷。電腦從來 不生氣。最近越來越多的人把自己的電腦跟國際網接上, 將要造成一個國際性的信息高速公路。『冷は何ぞ』也會走向這條路, 會成為跨國性的雜誌。

【和訳】何がクールかと言えば、それはコンピュータでしょう。だいいち、人間と違ってカッとしませんから。ともかく最近、猫も杓子もインターネットに接続しないと取らず、この調子なら世界をつなぐ情報ハイウェイも夢ではない。[What'sCool] も気がついたら、世界を駆けめぐる雑誌に成長しているかもしれません。



橋爪 大三郎 (はしづめ だいさぶろう) 1943年10月21日神奈川県生まれ。社会学者。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。東京工業大学教授。構造主義を踏まえた「言語派社会学」の樹立を目指し、執筆活動を行なう。理論社会学、宗教社会学、記号論、ポピュラー音楽研究。著書に『仏教の言語戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『實踐としての社会科学』『橋爪大三郎コレクション』など。





ナンシー関 ケシゴム版画家

あの身長で、あのキャラクターを貫き通してきた一本気。普通、愛嬌とかいいヤツとか別のキャラクターに逃げるだろうに。

橋爪大三郎 社会学者

まじめな話、橋本龍太郎さんはなかなかよい。

まず弟さんが、橋本大二郎。名前を見るからに、私と二人兄弟みたいである。身びいきで、プラス1点。

それに、その前の村山さんがひどかった。橋龍さんは、日米自動車交渉の決着の仕方

といい、タフな相手だとアメリカに一目置かれていた。国益にもかなっているの、プラスもう1点。

第三に、橋龍さんは、我慢するところは我慢し、じつと時期を待つ政治センスがある。先立つ二度の機会にも、おだてられて首相の座に飛びつくような馬鹿はしなかった。自民党総裁になりながら首相になれなかった河野さんや、いつもドジばかり踏んでいる海部さんとは格が違う。あまり取り巻きもないのに、意に介さず、颯爽としているのがいい。プラスもう1点。

第四に、新進党の小沢一郎さんと四つに渡り合える、対立の構図ができあがった点。小選挙区の総選挙が、がぜん面白くなった。日本の政治もこれで本物になる。プラスもう1点。

あえて難を言えば、二世議員のせいで、ちよつと下積みの経験が足りないと思われるところか。これから修羅場をくぐれば、もつと本当の大物になるかも。

橋本治 作家

まず、橋本つてーのは一流になれない人間の名前ですわね。そういう気がしますわね。総理大臣になっちゃいけないんですわね。なっちゃったら、こりやもう、同じアナのムジナで、小沢一郎もろとも消えてもらう、と。小沢&橋本が表舞台に浮上して「結局こいつらはもうどうの昔に終わってんだよな」ということをきっちり証明してもらわないでしよう。古臭いものは消えて、歴史という博物館に入る。浮かび上がった汚れを捨てるといのが今年のテーマで、小沢&橋本は、遂に浮かび上がった自民党的日本の最後の汚れだと思えます。

弘兼憲史 漫画家

橋本さんが男をあげたのは通産大臣時代の日米自動車協議の毅然たる行動でした。カンターさんを向こうにまわし、一歩もひかない「強い日本」をアメリカに示したの

『科学技術は地球を救えるか』

橋本大三郎・新田義孝編著／富士通経営研究所刊／定価二、二〇〇円



本書は九五年三月に開催された「科学技術フォーラム・自然科学と人文・社会科学とのパートナーシップII」(科学技術庁主催)の分科会の一つである「人類の生存と科学技術」

での討論をもとに新たに書き下ろしてまとめられたレポートである。環境問題の解決にむけて科学の新しい方向性を探ったもので、出席者(一五名)の専門分野は、社会学、国際経済論、水理学、大脳生理学、放射線生物化学——と多彩だ。

第一部「地球環境問題をどう理解するか」、第二部「生命から地球環境を考える」、第三部「中国からのメッセージ」、第四部「持続可能な未来への社会システム」の四部構成で、第二部がユニーク。例えば吉川研一・加藤陽両氏(物質生命情報学)は、

自然や生物の行っている現象と「非線形関数」の密接な関係を指摘、従来の科学技術文明は理路整然とした線形の数学を前提にしてきたが、「持続的発展」とは、混沌にみえる「非線形」の発想をとり入れた科学技術文明の構築によるものではないかと指摘している。

一方、第四部の西山賢一氏(文化生態学)は、持続可能な社会を考える新しい経済学の可能性として、エントロピー経済学、生態学的経済学、制度主義を紹介。制度主義は慣習・習俗・ルール・文化といった理路整然とした法則では割り切れない要素が経済活動に果たしている役割を解明することを課題としており、先の吉川・加藤両氏の論文と通じるところがあり、興味深い。

この例のように一見関係なさそうな学問分野が環境問題という接点で通いあう点が出てくる様子が読んでいて面白い。環境研究の今後の可能性を示唆しているといえよう。